

宗岡中だより



9月号 令和2年9月1日(火)
志木市上宗岡1-8-1 TEL 048-471-2241

「コロナ禍に 反して集う アブラ蟬」

校長 佐藤哲浩

二学期が始まって1週間が経とうとしていますが、今年の夏休みは連日の猛暑続きで、本当に身体に堪えたのではないのでしょうか。また猛暑にもかかわらず新型コロナウイルスの感染防止のために、マスクをして外出するため熱中症も心配だったと思います。私事になりますが、今年は遠出することなく、健康増進のためと思いウォーキング等を毎日行い、ゆっくりと過ごしました。



さて、今朝、朝日新聞を読んでいると、「特別支援学校 開校相次ぐ 深刻な教室不足が背景」という記事を目にしました。開校が相次ぐにもかかわらず教室が不足するというのは、相反することを言っていますが、これは特別支援学校を現在ある県立高校内に分校を新設するが、生徒数に対して教室が不足しているという意味です。埼玉県も再来年までに4校の分校を開校する予定です。文部科学省によると、全国の小中学校に通う児童生徒数は、1985年度の2226万人をピークに、少子化により昨年度は1280万人まで減少し、学校も4万2千校から7千校減少。一方特別支援学校に通う児童生徒は、2009年度に11万7千人だったのが、昨年度までに14万4千人になったのです。国は障がいのある子とない子が共に学ぶ「インクルーシブ教育」を推進しようと法改正を行い、通常校か支援学校か、子どもの就学先を決める際に保護者の意見が反映されるようになりました。また就学時健診で障がいを見つけやすくなったこともあり、通常校に通いながら校内の特別支援学級で学ぶ子どもも増えたのが理由です。

インクルーシブ(inclusive)には包括的などという意味があり、インクルーシブ教育とは、障がいのある子どもと障がいのない子どもがともに教育を受けることで、「共生社会」の実現に貢献しようという考え方です。ここでいう共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会を示しています。本校にも「ひまわり学級」があり、個の特性に応じて通常学級との交流を実践していますが、国連障がい者権利条約で言うインクルーシブ教育(全て同じ場で共に学ぶ)まで至っていないのが現実です。

話は変わって、二学期が始まり1週間が過ぎました。二学期は授業日が多く、勉強・部活動に腰を据えて取り組むことができる学期です。1年生は中学校生活にも慣れ、「我々が学校を支えていく」という意識をもって学校生活を送ってください。2年生は部活動、生徒会活動では学校の中心になります。「我々が学校を引っ張っていく」という気概をもって学校生活を送ってください。そして3年生は学校行事に精一杯取り組むとともに、自分の進路に向き合い、自己実現に向けて努力して欲しいと思います。